

## 著作の執筆と出版こぼれ話（その三）

所 功（81歳）

### C 皇室文化の研究と解説

- 5 『光格天皇関係絵図集成』（国書刊行会、A4判 388頁）令和2年（2020）3月（78歳）

平成の天皇は、70歳代中ごろから高齢化に伴って「象徴天皇としてのお務め」が難しくなることを懸念され、現行の『皇室典範』に規定のない「退位」（譲位）の可能性を考えられた。その際、皇統史上の先例として検討が行われたのが、約200年前の文化14年（1817）3月、数え48歳で譲位された第119代光格天皇（1771～1840）の例である。

一方、私は江戸中期の後桜町女帝（1740～1813）が書かれた仮名日記の宸筆本が京都御所の東山御文庫に伝存することを知り、その写真を購入して平成13年（2001）から京都産業大学で有志と解説する研究会を続けていた。この女帝は、譲位されてから、甥の後桃園天皇（1758～79）が1歳の欣子内親王を遺して亡くなると、将来その皇女を中宮（皇后）とするに相応しい相手少年皇族として閑院宮家出身の兼仁親王を擁立し、その光格天皇を訓育することに尽力された。

このような関係の深い光格天皇について事績と宸筆などを探求すると共に、「即位礼之図」「大嘗会本文御屏風」「新嘗祭神膳行列次第図」「寛政内裏還幸行列絵図」「石清水臨時祭再興図画」「賀茂臨時祭図巻」「桜町殿（仙洞御所）行幸図」「修学院御幸儀仗図絵巻」などの写真を購入し解説を加えて集成したのが本書である。

なお、39は、大正大礼100年（平成27年）ころから企画し「京都宮廷文化研究所」の有志たちと準備してきた「京都の御大礼」に関する特別展覧会の図録である。この中には江戸時代の大礼関係絵図などをカラーで数多く収録した。

- 6 『「五箇条の御誓文」関係資料集成』（原書房、A5判 241頁）平成31年（2019）1月（77歳）

明治元年（1869）3月14日（旧暦）に出された「五箇条の御誓文」は、「維新の国是」として重んじられ、戦後昭和21年（1946）元旦の詔書（俗にいう「天皇の人間宣言」）でも、これを冒頭に掲げ「新日本建設に関する」国是とされている。

そこで、専門外の対象ながら、かねて収集し検討した関係資料を、発布150年の機会に出版したのが本書6である。

これが原書房により半世紀以上前から続けている「明治百年史叢書」に入れられたのは、40清水澄博士（大正の東宮御学問所御用掛）遺著『法制・帝国憲法』に解説を加えて複製する際、原社長の配慮で同叢書に加えられて以来の縁による。

所収資料のうち、「五条御誓約奉対書」（宮内庁書陵部所蔵）は、五箇条の国是に賛同し実践を誓約した人々の自署であるが、その大部分に明治12年（1879）に宮内省で撮影された正装写真を添えた。その対照作業に尽力してくれられたのは、モラロジー研究所助手の後藤真生氏（京都産大院卒生）である。

- 16 『昭和天皇の大御歌』（角川書店、四六判 454頁）平成31年（2019）4月（77歳）

昭和天皇（1901～1989）は、「20世紀の名君」と称され、すでに多くの資料や評伝が出ている。その御製（大御歌）も、宮内庁侍従職編『おほうなばら』（読売新聞社、平成2年）などに872首収められた。また宮内庁編『昭和天皇実録』（東京書籍、平成26～30年18冊。翌年索引1冊）は、その大部分を関係の年月日に引用している。

そこで、実録の記事と御製を抄出して、吉成勇氏が編集長を務める月刊『歴史研究』に連載していた。すると、それを知った宮内記者のNさんから、昭和天皇に内舎人（うどねり）として長らく伝えたM氏が、天皇崩御後に処分された紙片を捨て難く保管していた中に「歌らしきもの」を見出し、その解説作業に全面協力を求めて来られた。

その多くは紙切に鉛筆でメモされた歌稿であり、所々の注記により天皇が晩年の昭和60年から63年9月に大量吐血されるまで書き留められたもので、既刊書未収の270余首にほかならないことが判明した。しかも、その全てを当時刊行準備中の本書16の全10章末尾に「補章」として掲出できることになった。それに御生涯の略年譜と御製の全国歌碑一覧および初句索引などを加えて出版したのである。

なお、昭和天皇が大正3年（1914）から東宮御学問所で学ばれた「国史」の教科書と「倫理」の御進講記録は43と44に翻刻・解説した。また、今秋完成予定の『未刊論考デジタル集成』⑤「昭和天皇と平成の天皇」（方丈堂出版、DVD-ROM）には、関係の論考と資料紹介を集成している。

22『皇室の伝統と日本文化』（モラロジー研究所出版部、B6判334頁）平成8年（1996）9月（54歳）

26『歴代天皇の実像』（同所、B6判254頁）平成21年（2009）3月（67歳）

28『皇室に学ぶ徳育』（同所、A5判341頁）平成24年（2012）3月（70歳）

モラロジー研究所（公益財団法人、令和3年から改称「モラロジー道德教育財団」）は、昭和元年（1926）設立された「道德科学」（moralogy）の研究修養団体である。その創立者の廣池千九郎博士（1865～1938）が、明治40年代に神宮皇學館教授（神道史など担当）を務め、「皇室研究」をライフワークとされていた。

そのような関係もあって、昭和の終りころから同機関誌などに寄稿を求められることが多くなった。それらを纏めて同研究所から出版されたのが22である。ついで26は、同機関誌『れいろう』（月刊）に平成16年（2004）から3年近く連載された「歴代天皇の理想」を本論とし、同研究所研究員の橋本富太郎氏（現在麗澤大学准教授）執筆「歴代天皇略伝」を付論として加え出版した。

この26には、連載当時の出来事などを導入部分などに記したので、約10年後の令和に入ってから全33章を修訂し（最後に令和の天皇を加筆）、各章に久禮旦雄氏（京都産業大学准教授）執筆の「補注」（近年の研究動向など）を加え、道德科学研究所のホームページ「ミカド文庫」に毎月初に掲載してきた。それが今秋完結するのでその全データを「歴代天皇の実像・再発見」と題して、『未刊論考デジタル集成』⑤に補入する予定。

さらに28は、大部分（全十二章のうち十章）が同研究所とも関係の深い日本学協会・日本弘道会・関西師友協会・明治聖徳記念学会・八坂青々会・霞会館などの会誌などに掲載されたものである。いずれも皇室が日本的な徳育の中核にあることを立証する主要な具体例を論述した。

なお、37の共編著『皇室事典』（初版、平成21年→新版、令和元年）は、高橋紘氏（共同通信宮内記者→静岡福祉大学教授）と米田雄介氏（宮内庁書陵部編修課長→正倉院事務所長）と私の三人が代表編者となり、数人の学友に協力をえて仕上げたものである。ただ、その原構想は、名古屋大学の四年先輩で文部省教科書調査官（日本史担当）としても机を並べた美和信夫氏（モラロジー研究所研究員・麗澤大学教授）と話し合ったことに端を発し、その早逝により、上記の橋本氏が参考資料の収集などに尽力した。

24『**天皇の人生儀礼**』（小学館、文庫判300頁）平成14年（2002）1月（60歳）

27『**天皇の「まつりごと」**』（NHK出版、新書判259頁）平成22年（2010）5月（69歳）

昭和35年（1960）2月生まれは今上陛下は、父君の即位に伴い皇太子となられ（29歳）、平成5年（1993）6月に雅子妃と結婚された。しかし、なかなか御子に恵まれず、ようやく同13年（2001）12月1日、敬宮愛子内親王が誕生されるに至った。その御懐妊報道が出て間もなく、小学館の文庫担当者から、天皇（皇室）の生涯に行われる儀礼の解説書を早急に仕上げしてほしいと依頼された。

そこで、夏休みから秋口までに全力を注いで書いたのが24である。これは「近代的な皇室儀礼の形成」を序章とし、(一)誕生前後の儀礼、(二)幼少期の帝王教育、(三)成年・立太子・成婚の儀礼、(四)踐祚式と即位礼・大嘗祭、(五)天皇の公務と宮中祭祀、(六)大喪の礼と式年祭について、各々おもに明治以来の実例を紹介して、自分なりに人生儀礼の全体像を再認識する好機となった。

しかも、それから8年後（平成21年）、NHK出版の新書担当者から「象徴天皇」の役割について総合的な解説を書くよう依頼された。そこで、24の(五)に焦点を絞り、「象徴としての祭祀と公務」とりわけ宮中祭祀に重点を置いて詳述したのが27である。この時も、天皇の「祭祀」も「公務」も共に「まつりごと」と称され、現行憲法下の今なお大きな役割を果たしている事実を再認識することができた。

なお、この24文庫と27新書は、一時かなり一般に普及したらしい。そのせいか、この前後から天皇・皇室に関する単行本やムック本の企画や監修を依頼されることが多くなった。たとえば、68『**歴代皇后125代総覧**』（新人物往来社、平成18年）、87『**歴代天皇知れば知るほど**』（実業之日本社、平成21年）、67『**日本の（男性）宮家と女性宮家**』（新人物往来社、平成24年）、および84『**「古事記」がよくわかる事典**』（PHP研究所、平成24年）、85『**まんがと図解でわかる天皇のすべて**』（宝島社、平成24年）、86『**初心者にもわかる昭和天皇**』（メディアックス、平成25年）、88『**天皇・皇室の将来**』（洋泉社、平成28年）、91『**皇太子殿下と雅子さま**』（メディアックス、平成31年）などである。

（かんせいPLAZA 令和5年8月6日）